

最優秀賞

神奈川新聞社長賞

私と弟

平塚市立中学校
二年 小林 愛海

私には小学校一年生の弟がいる。弟は自閉症スペクトラムという障害をもっている。しゃべれない、突然大声で叫び出したり、泣き出したり、気持ちの切り替えが難しいなど体は六歳に成長しているが知的年齢は一歳十ヶ月のままなのだ。

私が十二歳で弟が四歳の頃、弟は障害という診断を受けた。私はその事を母から知らされるまで弟が障害児だと考えた事も無かった。弟は周りの子とは少し言葉が出るのが遅れているのだと思っていた。私は弟が障害児であるという気持ちに変化した事は無かった。だから、周囲の人たちも私と同じように障害という事を気にせず弟に接してくれると思っていた。しかし、祖父母は私が思っていた反応では無かった。

「それはいつ治るんだ？」や「いつしゃべり始めるの？」など、そんな事ばかり言っているのだ。障害というものは病気で無い。だから、治ったりもしない。これからしゃべるのかどうかも分からない。障害は一生付き合っていかなければならないものなのだ。私は祖母の反応をみて、何故弟の障害をとて悪い病気のように扱うのかすごく疑問に思った。それと同時に私は祖母に対する哀しみの気持ちをもった。だが、世間の人たちも祖母と同じ考えだと思い知らされた。

私が弟と一緒に出掛けた時の事だ。弟はしゃべれないので自分の気持ちを上手く私たちに伝える事ができない。そのため、ストレスがたまっていき、それが爆発してしまう時がある。そうすると急に大声を出したり泣き叫んだりしてしまうのだ。弟は見た目ではつきり、障害と分かる訳ではない。そのためか、余計に周囲の人たちには、「この子は何なの？」といったような白い目で見られる事が非常に多い。また、「おい、うるせえなあ。」などとわれ、店を出て行かなければならない事があるのだ。私はこのような体験を繰り返す中で、世間の人たちの障害に対する思いなどにとても落胆した。やはり、世間の人々は祖母のような考え方の人が大半なのだと感じた。

今、世間ではインクルーシブという取り組みが進められている。インクルーシブというのは、障害をもつ人もたない人も関係なく、一人一人に合った援助、すなわち同じ場所で生活するという共存社会を目指す事をいう。だが、私はまだインクルーシブな社会とは程遠いと思う。弟は現在養護学校に通っているが、通常の小学校の支援級に入る事も検討していた。だが、

「おむつが取れていなかったり、言葉が出ていないなら養護学校の方が良い。」という事を言われたそうだ。また、弟と同じ障害をもつ子も弟と同じように養護学校を薦められたそうだ。インクルーシブという事で、行政は障害をもつ子供も地域の学校へ通うようにと薦めている。だが、弟のような重度の障害をもつ子供は学校に受け入れてもらえない現状がある。それはとてもおかしい事であると思う。このような行政と教育現場の差の問題を早急に解決し、インクルーシブ社会の土台をつくってほしい。

障害を理解するのはとても困難な事だと思う。祖父母が弟と生活を共にする中でゆっくりではあるが障害を理解し弟の障害に正面から向き合って考えられるようになってくれたように、いつの日か障害をもたない人たちも理解できるようになると思っている。

私は障害をもつ弟と生活し接していく中で障害が日常的になった。そのように周囲の人たちも障害というものが日常になってほしいと思う。

インクルーシブの第一歩は障害を日常的にみんなが感じるようになることなのではないだろうか。